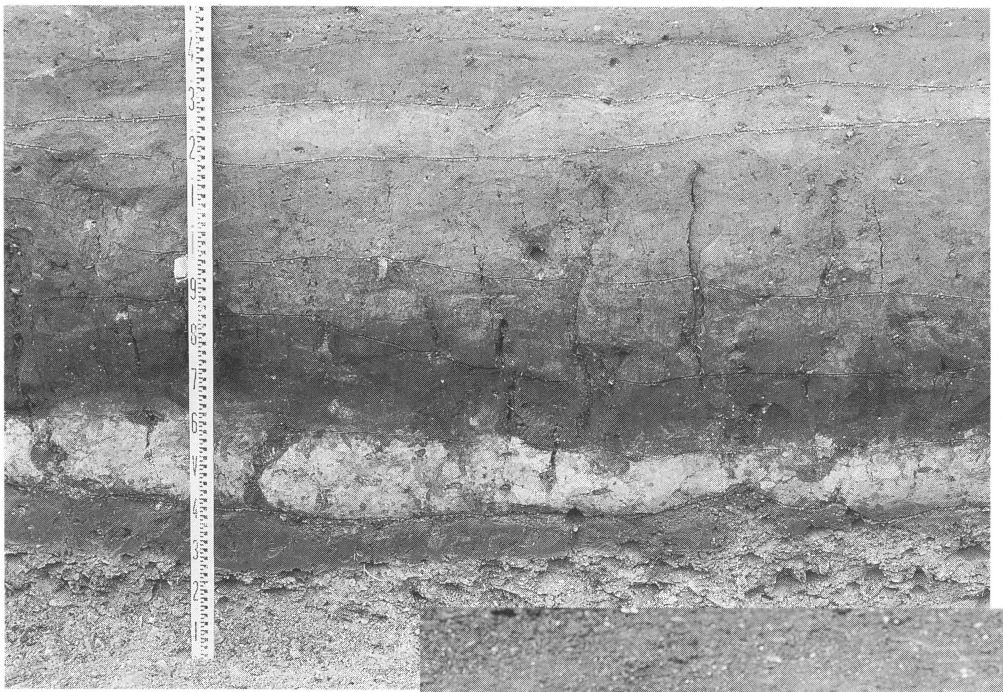
財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

年報

平成
５年度

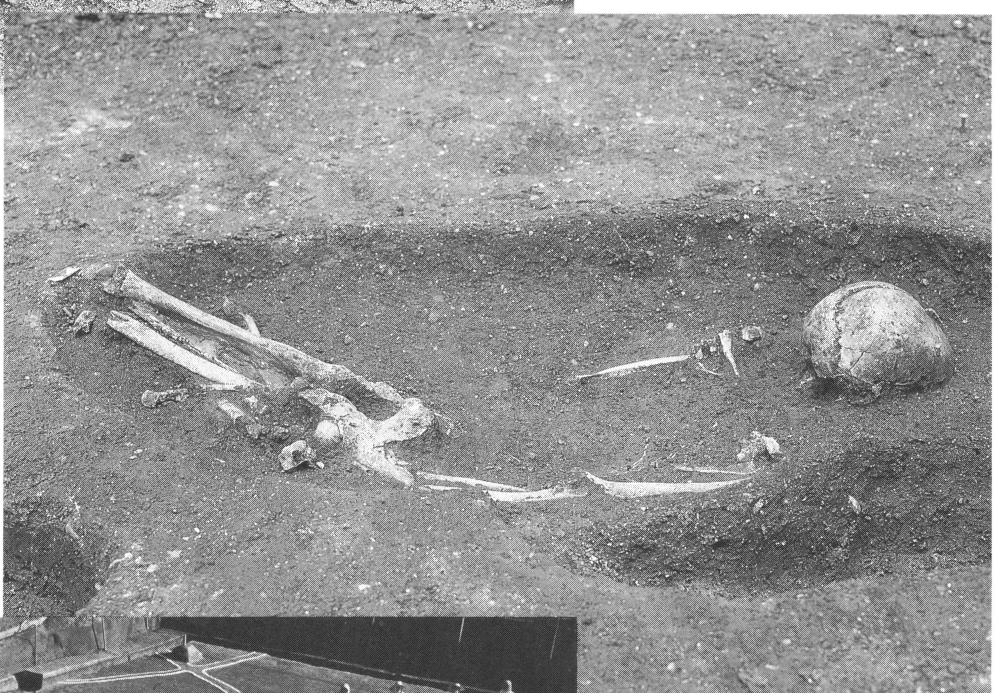
1994

㈶愛知県埋蔵文化財センター

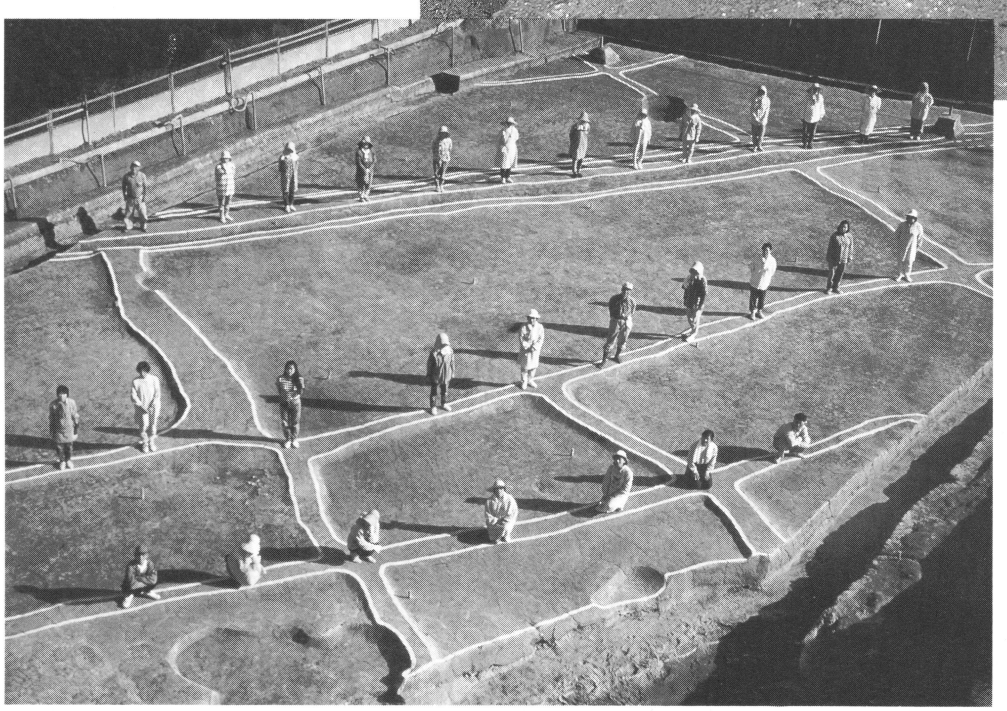


アカホヤ火山灰層
〈広坪遺跡〉

←



埋葬された縄文人
〈川地遺跡〉



古墳時代前期の水田跡
〈大毛池田遺跡〉

序

平成５年度は、政権交代・経済不況・異常気象など日本社会全体が揺れ動いた年でありました。埋蔵文化財の発掘調査を取り巻く状況もこうした社会の変化とは無縁ではありませんでした。

さて、埋蔵文化財の発掘調査と保護の啓蒙普及活動を本務としている当財団も９年目を迎えました。本年度は、年間発掘調査面積も６万㎡に及び、また朝日遺跡をはじめとする調査報告書の刊行も10数冊を数えています。

本年度もこれらの発掘調査の概要や調査研究、普及活動の記録を「年報　平成５年度」として公表することとなりました。本書が考古学の研究はもとより、埋蔵文化財の保護と活用の上でもお役に立つことができれば誠に幸いと存じます。

本書の刊行及び発掘調査にあたっては、理事・専門委員の諸先生方及び愛知県教育委員会のご指導を賜るとともに、建設省・道路公団・愛知県土木部・総務部・企業庁・道路公社・地元各市町村・その他の関係者の方々から多大なご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成６年３月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

理事長　高木　鐘三

例　言

1．本書は、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの平成５年度事業の概要をまとめたものである。

2．調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、愛知県土木部・総務部・企業庁から、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて、本センターが実施した。

3．調査の概要は、各遺跡ごとにまとめたものである。

4．普及活動の概要は、本センターの事業のうち、研修会・埋蔵文化財展などの埋蔵文化財の発掘調査以外の事業についてその概要を掲載した。

5．発掘調査に当たっては、理事・専門委員の各氏及び愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導助言をいただいた。

6．本書の作成に当たっては、小沢美紀・中村明実・服部笑子・木谷元子・山田房子・野川佳江・平野佐織各氏の協力を得たほか、関係各機関並びに、地元作業員の方々には多大な援助を賜った。

7．調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。

8．各調査区の名称はローマ字で表し、昭和63年度までは前にその年の年号による年度を、平成元年度以降は西暦による年度の下２桁を冠した。そのため平成５年度は93〇区となる。

9．文責は各文末に記した。

財団法人　愛知県埋蔵文化財センターの組織

役　員

理事長

高木　鐘三

常務理事

豊田　次男

理　事

野村　光宏	愛知県教育委員会教育長
井関弘太郎	名古屋大学名誉教授
伊藤　秋男	南山大学教授
大参　義一	愛知学院大学教授
坪井　清足	㈶大阪文化財センター理事長
楢崎　彰一	名古屋学院大学教授 (名古屋大学名誉教授)
鈴木　光雄	都市教育長協議会会長(犬山市教育長)
佐々　信雄	町村教育長協議会会長(大口町教育長)
蛇川　雄司	愛知県土木部長
倉知　昌視	愛知県教育委員会社会教育部長
武田　　晋	愛知県清洲貝殻山貝塚資料館館長 (清洲町長)
山田　敬二	愛知県陶磁資料館館長

監　事

滝澤　尋文	
原田　宗雄	愛知県出納事務局次長

専門委員

考古学	楢崎　彰一	名古屋学院大学教授 (名古屋大学名誉教授)
文献史学	福岡　猛志	名古屋大学教授
地理学	海津　正倫	名古屋大学助教授
建築史学	小寺　武久	名古屋大学教授
考古学・動・植物学	渡辺　　誠	名古屋大学教授
形質人類学	池田　次郎	九州国際大学教授
保存科学	沢田　正昭	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター遺物処理研究室室長
岩石学	諏訪　兼位	日本福祉大学教授 (名古屋大学名誉教授)
木材組織学	木方　洋二	名古屋大学教授

職　員

事務局長(兼管理課長)　近藤　雅英

管理課

主　査	谷　　隆盛	
主　事	伊藤　　弘	伊藤　博樹
	小杉　正樹	伊藤　晴美

調査課

課　長	加藤　安信		
課長補佐兼主査	野本　欽也		
	都築　暢也		
主　査	大竹　正吾	太田　芳巳	
	杉浦　　茂	服部　信博	
調査研究員	小澤　一弘	高橋　信明	
	前田　雅彦	赤塚　次郎	
	神谷　知幸	小池　一徳	
	松田　　訓	伊藤　秀紀	
	黒田　哲生	石黒　立人	
	宮腰　健司	水谷　寛明	
	栗林　典昭	今西　康二	
	西原　正佳	酒井　俊彦	
	池本　正明	余合　昭彦	
	秋田　幸純	川井　啓介	
	小嶋　廣也	服部　俊之	
	鈴木　正貴	牧　　謙治	
	蟹江　吉弘	樋上　　昇	
	堀木(旧姓楯)真美子		
	永井　宏幸	鬼頭　　剛	
	北条　真木	原田　　幹	

目　　次

Ⅰ．平成５年度事業の概要……1
Ⅱ．遺跡調査の概要……9
調査の理由と工程……10
遺跡の位置……12
田所遺跡……14
大毛池田遺跡……30
大毛沖遺跡……40
西上免遺跡……52
東海北陸自動車道試掘調査……54
清洲城下町遺跡……56
一色青海遺跡……64
正楽寺・儀長城遺跡……72
名古屋城三の丸遺跡……74
刀池古窯跡……80
烏帽子遺跡……84
広坪遺跡……86
島田陣屋遺跡……90
吉田城遺跡……95
川地遺跡……99
Ⅲ．調査研究……103
伊勢湾周辺地域の磨製石包丁、若しくはその象徴性……加藤安信……104
愛知県の弥生時代石器をめぐる基礎的研究……永井宏幸・原田幹・石黒立人……118
大毛池田遺跡93Ｂ区ＳＸ10、ＮＲ02出土の遺物について……北篠真木……128
濃尾平野における歴史時代の地震痕　その２……服部俊之……134
航空写真を利用した自然地形分類と遺跡の立地……鬼頭剛・服部信博……143
愛知県西尾市清水遺跡から出土したカメの遺体について…矢部隆・堀木真美子……153
――なぜニホンイシガメのメスが多く出土するのか？――
考古学的報・論文における引用文献、参考文献、註(注)……加藤安信……162
Ⅳ．埋蔵文化財センターの活動……169
埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会……170
発掘調査技術等研修会……171
現地説明会……171
資料の貸出・提供……172
検討会……174
Ⅴ．付篇（受贈図書目録）……175

Ⅰ．平成５年度事業概要

平成５年度の事業概要

愛知埋文'93

１．全般的動向

初めに埋蔵文化財調査をめぐる本年度の全般的動向について眺めてみよう。

平成５年度に実施した発掘調査は12事業、15遺跡であり、整理・報告書作成関連は15事業、17遺跡、報告書作成冊数９冊であった。調査面積は当初68,536㎡であったが、事業変更に伴い最終的には68,447㎡に落ち着いた。昨年度の34,244㎡に対して34,203㎡の面積増、すなわち200％増であり、昭和60年度に本センターが設置されて以来、昭和63年度に次ぐ調査面積となった。これは、すでに昨年度の年報において予測しておいたように、東海北陸自動車道建設用地の買収が急ピッチで進展したため、一宮市・尾西市・葉栗郡木曽川町地内において40,000㎡に近い面積の調査が可能となったからであった。小規模分散的な調査状況が続く中で、再びかつての名古屋環状２号線関連調査のような一極集中的な様相をも見せ始めている。

これにともなって調査課の陣容も昨年度にたいして10名増の38名となり、これはセンター開設以来最多の人員配置となった。東海北陸自動車道関連の調査状況からみて、このような40名弱という調査課陣容の傾向は、ここ２、３年は続くものと想定される。プロパー職員も、退職者補充を含めて３名採用となり、これによって合計14名となった。プロパー職員全体の年齢構成上のバランスも少しは是正されることになったといえよう。

いっぽう、整理・報告書作成をめぐる環境については、二、三の微妙な変化と兆候が表れてきている。その第一点は、大量の遺構と遺物を検出・出土した朝日遺跡と松河戸遺跡に代表されているように、現地調査終了後数年間を経過し、それが故に計画的な報告書作成作業を行うことができた大型の報告書作成事業が、事実上本年度をもって終了することである。多くの調査担当者がすでに転出してしまったために、残された１・２名の調査研究員で取り組むことを余儀なくされ、かつまた注目すべき歴史情報を多々含んでいる遺跡であったために、その報告書作成作業は調査研究員に対し苦しみと共に喜びを与えてくれたのであったが、同時にそれは補助員採用に典型的に表れたように、肥大化した整理体制の一つの到達点をも意味していたのである。その見直し作業を必要とする時期がいよいよやって来たことを調査研究員一同はっきりと認識していかなければならない。第二点目は、日本の経済状況の悪化の中で、調査費用の積算、とりわけ整理・報告書作成事業に関する積算根拠がより厳格に求められるようになってきたことである。もちろん本センターでは、従前より適切な予算積算と執行に努めてきたと自負するが、必要調査研究員の算出、ページ数の割り出し方、補助員採用人数等についてこれまで以上に明解な説明が必要とされるようになってきている。この点についても、昨年度からの読みもあって、これまでの実績を再検討して各整理工程に区分した係数、指数表を作成したことが十分に役立ったと言っていい。

いうまでもないことだが、上記２点の状況変化の中からわれわれが読み取っていかなければならないのは、次の二つのことがらである。すなわち、その第一は、現地調査の段階から各調査研究員はそ

の遺跡の報告書作成についてのイメージを次第に高めていくようにしていなければならないこと、そしてその第二としては、今や整理・報告書作成体制に関する作業環境の再構築が求められるようになってきていること、の二つの視点である。ただし、後者を押し進めるにあたっては、余りにも機械的とならないよう十二分に自戒しておきたい。

このように、平成５年度の発掘調査をめぐる全体的状況については、増大する調査面積、そのいっぽうで再検討を求められている整理・報告書作成体制、というように総括することができる。

２．発掘調査

今年度調査においても、昨年度と同様に特段の注目を浴びるような成果は得られていない。その意味では、やや散漫な検出資料の中からいかにして歴史的情報の束をとりだしていくかが問われた年度であったと言える。特に、2,000㎡から3,000㎡のかなり広い調査区を散在的にクロス・ワード・パズルのようにして発掘調査している東海北陸自動車道関連の一宮市田所遺跡、大毛池田遺跡、大毛沖遺跡にあっては、遺構が散漫でありかつ出土遺物も面積に比して少量であるために遺構の捉え方がかなり難しい現状となっている。旧地形復元をすすめると同時に、遺構の分布とその有機的つながりについての視点と理解を１調査区局所的ではなくより広い範囲にまで拡大して行っていくことが必要であると考える。そうでないとクロス・ワード・パズルは解けないだろう。

以下に、時代毎に分け調査成果と検討課題についてまとめておこう。

（１）旧石器時代・縄文時代

額田郡幸田町広坪遺跡では、土石流の痕跡を示す旧河道の川岸とみられる地点から、早期の押型文土器や縄文時代中期の五領ヶ台式と同類とみられる爪形文を施した土器が少量出土した。包含層はいわゆる黒ボク土壌であり、一部に、アカホヤ火山灰層を含む。五領ヶ台式の土器は確実にアカホヤ火山灰層の上位からであり、押型文土器や貝殻条痕文土器はアカホヤ火山灰層下の黒色土層からの出土である可能性が高い。したがって、これらの中期前半期の資料がその中から出土したことは近年とみにその形成過程が問題となっている黒ボク土壌の形成時期を考える上でなんらかの参考になるものと思われる。

県道堀切・中山線建設に先立って調査を行った渥美郡渥美町川地遺跡からは、縄文時代後期を主体に前期から晩期までに亙る資料が得られた。古く1922年に京都帝国大学の清野謙次博士による発掘調査が行われ24体の縄文人骨が出土したことのある本遺跡からは、今次調査においてもわずかに残る貝層下の土坑から１体の人骨が発見された。歯が抜け落ちた下顎骨の退化状態からみて、この人骨は老年の女性骨と見積られている。住居跡などの遺構は検出されず、また貝層が希薄な状況をも踏まえて考えてみると、当該調査区は遺跡の縁辺に近い位置に当たっているものと推定される。出土土器の主体は堀之内式及び宮滝式で、伊川津遺跡、吉胡遺跡など渥美半島内湾部に縄文後・晩期に出現してくる貝塚遺跡の中でも最も早い段階に位置づけられており、貝塚遺跡形式のプロセスを見る上で好材料となろう。また、中世の屋敷区画とみられる浅い溝の中から、後世に捨てられたと思われる100点を超える大量の石錘が出土しており、縄文期に網漁が盛行していたことを窺わせている。

（２）弥生時代・古墳時代

中島郡平和町と稲沢市域とにまたがって広がっている一色青海遺跡からは、高蔵式期併行期の竪穴住居７棟と土器型式の上では同型式期におかれる方形周溝墓８基が検出された。７棟の住居のうち２棟は焼失家屋と思われ、炭化した垂木が屋内に倒壊した状態で検出された。火事にあった弥生のムラの一端が掘り出されたものと思われる。方形周溝墓はすべて竪穴住居と同一地点において、20cm程のシルトの間層をおいたその上面から検出されている。したがって、厳密に言うならば、住居の時代と墓域の時代とは時期差があるわけで、少なくとも今次調査の範囲からは方形周溝墓を築いた人々の居住域は検出されてはいない。方形周溝墓は周溝が全周する形態又は一隅のみに陸橋を持つタイプで、溝を共有している例もある。一辺７ｍから12ｍの規模を持つ比較的大形の墓が多く、継起的繁成とその勢力の程を窺い知ることができる。集落の存続時期が短期間に限られていたとはいえ、これらが尾張低地部のうちでも、朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡などの南部地域と一宮市萩原地区遺跡群との間のこれまでとかく資料不足の感が否めなかった空間とをつないでいく資料となったことは間違いない。

昨年度に引続き発掘調査を実施した豊川中流域の新城市島田陣屋遺跡からは、１基のみであるが方形周溝墓が検出され、昨年度検出例と併せて合計６基となった。今回の検出例は昨年度の事例とは異なって四隅に陸橋を持つタイプで、形態の上では中期的な様相を示している。しかし、溝内から出土した供献土器はすべて後期欠山式期に属するものばかりであるいは、溝の上面が削平されたために、浅く掘り込まれた四隅部分が残ってしまったとも解釈される。特記すべきは、溝内から人面付土器の人面部分が発見されたことである。これを土偶形容器とする見方もあるが、口縁部の湾曲形態からみて、人面付とする方が妥当であろう。眉と鼻は粘土紐で表現され、顎の形は丸く形どられていて、やや横長の顔つきをしている。赤彩の痕跡も認められる。弥生中期のうちに位置づけられる可能性が高く、当該方形周溝墓とは時期が異なると想定されるため、方形周溝墓への供献品として捉えることは適切ではない。類似資料の調査を必要としている。

尾張平野北端部でも、東海北陸自動車道の事前調査にともなって、弥生時代から古墳時代にかけての新しい知見が得られつつある。昨年度に鎌倉時代の墳墓堂と考えられる建物遺構が検出された田所遺跡の北側の地点からは、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての集落跡が発見されたし、またいよいよその中心部分に迫りつつある尾西市・一宮市の西上免遺跡では、低丘を持つ方形周溝墓が２基検出されている。田所遺跡の場合は、調査部分の遺構の性格が南半部とは全く異なるものであるため、時期が複合する一つの遺跡として捉えるよりも別の遺跡として区別した方がいいように思われる。そこで、今後は遺跡名を小字名により南道手遺跡と改称する。

これまで当地域では検出例の乏しかった古墳時代の水田遺構に関しても資料が蓄積されつつある。一宮市大毛池田遺跡では幅80cmほどの大畦畔とそれに沿って整然と配置された小区画の水田跡が検出され、農耕儀礼に使用されたとみられるＳ字甕などの土器類や焼土が水田区画の片隅から発見されている。この水田遺構は古墳時代初頭に位置づけられ県内最古の出土例となった。大畦畔と少畦畔とで区画された古墳時代前期の水田遺構は田所遺跡でも検出されている。また、古墳時代前期の水田遺構を貫き、奈良・平安時代の遺構に掘り込まれている地震痕が田所遺跡で検出された。これまでにみられなかった事例で、７世紀後半代に近畿・四国地方を中心にして発生した白鳳南海地震に関連する地震痕ではないかと注目されている。

（3）古代

古墳時代水田遺構の上面において奈良時代から平安時代の竪穴住居が多数発見された大毛池田遺跡からは、B区において何らかの堂の基壇と目される遺構が検出され、その周辺から1点の銅椀の蓋や数点のミニアチュア壺、灰釉陶器段皿などが出土している。これらは鎮壇具、あるいは堂内で使用された祭礼用具の一種とみなされよう。小型壺は猿投窯産で折戸10号窯式期から井ヶ谷78号窯式期におかれるものであり、9世紀前後の古代集落の一端が明らかになりつつある。冒頭で述べたように、これらの資料から古代あるいは中世の集落景観を想定していかなければならない。

（4）中世

昨年度調査で中世の集落を方形に取り囲む大溝が確認された田所遺跡では、溝の中間部分が検出されると同時に、集落の北西隅に設置されていた墓域の残りの部分も明らかとなった。今次調査において中世の環濠集落の西端部分が概ね明らかになったといえ、大溝の南北長は4町に及ぶ。また、墓域に関しては、墳墓堂と見なした建物遺構の周辺に小区画で区切られた墓地が展開する形態を示していることもわかった。集落の内部は、残念ながら調査区外に当たっていて、明らかにはしえない。最近、集落をめぐる大溝の存在も含めた中世の田所集落に関して、地元に保存されてきたいわゆる「小島家文書」の記述との関連性が指摘されている。大毛沖遺跡、大毛池田遺跡をも含めた葉栗郡大毛郷との関わりや荘園及び荘域の問題など、今後の史料批判的な研究が一方で求められているところでもある。中世村落の全体像を明らかにしていくためには、集落内部の実態を解明していくことが是非とも必要である。このため、近い将来に市教育委員会等による学術的な発掘調査が行われ内容が明らかにされていくことを期待したい。

田所遺跡の南方約1㎞の地点に広がる大毛沖遺跡では、13世紀前半の集落のすぐ外側に切り開かれた畑の畝状遺構が検出され、捕捉された昆虫が塊のようにして捨てられているピットが7ヵ所発見された。昆虫はヒメコガネとマメコガネであり、いずれも大豆や桑などの葉を食べ、畑作食物生産にとっては害虫と目されているものである。その意味で、中世の畑作農耕のあり方や害虫駆除の儀礼を知る好資料を得たと言える。なお、大毛沖遺跡からは12世紀の遺構に切り込まれた地震痕が見つかった。検討すべき余地も残されているが、濃尾地震の周期生を示すものではないかとも見られている。

中世の生産遺跡としては知多市刀池古窯の調査があった。事前の予算見積り3基に反して6基も検出され、しかも窯体の遺存状態は予想以上に良好であった。小さな丘陵尾根の背を分けて13世紀前半代の山茶椀窯2基と13世紀後半代の甕窯4基とがそれぞれ区分して築かれていた。分焔柱から天井部までが垂直に立ち上がり、燃焼室が非常に高く構築された甕窯も2基みられた。焚口空間が広く設定されているもので、知多窯の中でも類例が殆どみられない形態を示している。

これまでにも特に尾張平野低地部で多数検出されてきた方形土坑群が、一色青海遺跡で100基以上発見された。方形土坑は中世の土壙墓として理解されているが、骨片の遺存が全くみられないため、残存脂肪酸分析などによって確実に遺体埋葬が行われた痕跡をおさえておくことが求められる。また、居住域との関係、規格や規模、設置方位の変異の意味などについても分析を進めていく必要がある。

中世城館跡の調査では清洲城下町遺跡の継続調査と名古屋城三の丸遺跡、新城市島田陣屋遺跡の発

掘調査があり、五条川改修に伴う清洲城下町遺跡の調査はいよいよ最終段階を迎えつつある。清洲城下町遺跡ではD区から城下町前期の南北方向に走る方形居館の区画溝とみられる幅7.86mの溝SD01が検出され、中から大窯I期に属する大量の陶器類、漆椀、箸・柄杓などの木製品が出土した。祭事用に使われたとみられる土師器皿、卒塔婆、墨書土器・木器、人獣鳥骨も多数あり、一括資料として評価できる。この他C区の本丸地内からは金箔瓦や墨書により花押の記された瓦片が出土している。江戸時代に陣屋が置かれた島田陣屋遺跡の調査は昨年度に続くものであるが、今回新たに戦国時代の屋敷区画溝や掘立柱建物、井戸などが検出された。これらは江戸期に陣屋が当地に置かれる前史を形作るもので、陣屋の位置選定を考える上で大いに参考になるものと思われる。

本センターが行った名古屋城三の丸遺跡の調査はこれで5例目に当たり、今次調査においても江戸時代の整地層の下から戦国那古野城の遺構が見つかった。遺構は堀のみに留まっていて、建物遺構は未検出に終っている。それにしても、那古野城の遺構はかなり広い範囲にわたって分布していて、調査区がパッチワーク的であるために全体像の把握が未だやや厳しい段階にあるとは言うものの、城郭構造やその時代的変遷、今川氏が築いた城郭遺構であるのか、あるいは略奪した織田氏の遺構であるのか等々の問題点についても考察すべき時期に達してきたようである。

（5）近世

今回の名古屋城三の丸遺跡の調査区は、18世紀以降では渡辺家、横井家、松井家の3軒の屋敷地に当たっている。調査では、屋敷造成に伴う整地層の捉え方にやや問題を残したが、名古屋市蓬左文庫に残されている絵図に描かれた屋敷境の溝ははっきりと検出された。当初は清水家、長野家などの屋敷地であり後に渡辺半蔵家の添屋敷となった屋敷地と横井家との境の溝が戦国那古野城期の屋敷区画溝のラインとほぼ一致しているのは興味深い。

昨年度からの継続調査となった豊橋市吉田城遺跡では、4軒の屋敷地と関連遺構が検出された。ここでも「吉田藩士屋敷図」に基づいて居住者を割り出して行くことができ、武士の生活の具体的な実相に迫っていくことが可能となってきた。

両遺跡からは、廃棄土坑、地下室、建物遺構、庭石等の遺構も見つかっている。調査報告書作成に当たっては、出土遺物の器種別・産地別統計法を用いるなど、これまで本センターが行ってきた共有の分析方法と研究蓄積とを踏まえて資料分析を進めていく必要があることはいうまでもない。

なお、伊勢湾に面した砂堆上に立地している東海市烏帽子遺跡からは、思いもかけず弥生時代から古墳時代の遺物に混じって、江戸初期の御庭焼きの製品や焼台などが出土した。これにより、これまで殆ど分からなかった尾張藩第二代藩主徳川光友の築いた横須賀御殿の一角及び御庭焼き生産の一部が明らかになったわけで、注目されている。

3．資料整理・調査報告書作成・調査研究活動

調査報告書については、15遺跡に関して9冊の作成を行い、これで総計第56集までに至った。冒頭で述べたように、昭和56年の㈶愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部発足以来進めてきた名古屋環状2号線建設に関連する朝日遺跡、松河戸遺跡などの大形遺跡の調査報告書がようやく終了し、ある意味では最後の報告書大量生産の年度になったと位置づけることができる。

『朝日遺跡Ⅴ』は、最終分冊の土器及び総括編である。コンテナー10,000箱以上にのぼる大量の土器を短期間に分類、資料化していくのは至難の技で、まずはできるだけ多くの基礎資料の提示に努めた。総括編は、むしろ『朝日遺跡Ⅰ』から『朝日遺跡Ⅳ』までで行いえなっかった分析・論考の補謂といった内容である。合計５分冊の中で、全国的に注目を浴びた朝日遺跡の遺構・遺物の十全な資料化と歴史的評価を行いえたか、少しこころもとない面もある。全体的に時間不足であったという問題は残るだろう。

『月縄手遺跡Ⅱ』では、当地域における弥生時代前期の環濠集落について論じている。名古屋市西区所在の月縄手遺跡は尾張平野部では名古屋市高蔵遺跡と並ぶ最古の環濠集落であり、当地域の弥生文化成立をみる上で好資料となっている。また、合計で65,306㎡という非常に広い面積の調査結果をまとめた春日井市『松河戸遺跡』では、焦点を古墳時代にしぼり込み、これまでに提唱してきた廻間様式に後続する土師器編年「松河戸様式」の一層の深化を図っている。さらに『堀之内花ノ木遺跡』では、遺跡が尾張国分寺の伽藍の一部に当たっていること、遺物の出土状況と『続日本紀』等の記事との対比などから、尾張国分寺の消長について具体的に言及するとともに、尾張国分寺系瓦についての詳細な分析を行っている。

中近世に関する報告書のうち、『室遺跡』では溝に囲まれた屋敷地内から出土した12世紀から14世紀代の全ての土器類の器種構成比の抽出を行い、また戦国時代から江戸時代に及ぶ『清洲城下町遺跡Ⅳ』、『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』でも口縁部統計法による産地及び器種分類を試みた。『室遺跡』の編集者川井啓介が指摘しているように、統計の取り方についてはまだまだ検討の余地があるとはいうものの、こうしたデータの蓄積と比較検討により、同一時代の社会階層別生活様式の差異が次第に明らかにされていくものと考える。窯業生産遺跡である「黒笹Ｇ２号窯跡」では、民俗学的手法を用いて山茶椀の製作工程復元を行うとともに、容量の変化についても考察を加えている。

昨年度に引続き論考編に数本の論文を載せることができたが、最近は執筆者が固定化しつつある傾向は大いに気になるところだ。だが、新任職員の意欲的な取り組みは素直に歓迎されよう。内容は、弥生石器の基礎的なリスト作成、磨製石包丁の分析、濃尾平野の地震痕、航空写真を利用した地形分類と遺跡立地の問題など多岐にわたる。

４．普及・啓発活動、その他

埋蔵文化財展及び埋蔵文化財講演会は東三河地方の新城ふるさと情報館郷土資料室と新城文化会館を会場にして実施した。埋蔵文化財展は「新出土品展」として、ここ１、２年のうちに調査を行った幸田町牛ノ松遺跡、豊田市三斗目遺跡、稲沢市堀之内花ノ木遺跡、名古屋城三の丸遺跡などの調査成果と特別コーナーとして年代測定法を取り上げて展示解説し、1,600名近い人々の参加を得た。講演会では國學院大学の小林達雄氏により「縄文姿勢方針」という演題の話をいただき、好評を博した。また、今回初めて埋蔵文化財講座として、新城市島田陣屋遺跡、稲沢市堀之内花ノ木遺跡、清洲城下町遺跡の３遺跡を取り上げて、担当した調査研究員がその遺跡のもつ歴史的意味について分かりやすく解説発表した。この試みについても概ね好評を得たと評価することができ、今後も継続的に企画して行くことが望まれる。

基礎研修会、専門研修会については例年と変わるところがなかった。専門研修会では、寒川旭氏による地震考古学や三辻利一氏による蛍光X線分析に基づいた陶器類の産地同定法など、興味深いテーマを取り上げたが、市町村からの参加者が予想以上に少なかったのは残念である。基礎研修会についても、近年、県教育委員会文化財課が独自に埋蔵文化財に関する地区別打ち合せ会を実施しているので、その内容について重複する部分がないかどうか再検討を必要とする時期に来ているようだ。

現地説明会は、名古屋城三の丸遺跡、新城市島田陣屋遺跡、稲沢市・中島郡平和町一色青海遺跡、一宮市大毛池田遺跡の4ヶ所において実施したのみである。40,000㎡という広い面積を調査した一宮地区で年度末になってようやく一回開催することができたということについては、反省が必要かも知れない。遺構が散漫で見せ場にやや欠けたという点は確かにある。だがそれ以上に、用地買収状況や工事工程変更の絡みから、どうしても工程優先主義の建前が取られ、ゆとりがなかったことは正直に言って否めないところである。しかし、開催したいずれの現地説明会においても400名から200名近い方々の参加があって、力づけられている。

平成6年度、つまり来年度は本センター発足10年目に当たる。このため、記念事業の一つとして10年間の調査研究実績をまとめた図録の作成を目指し、今年度から調査課内検討会を通じてその原案作りに入った。次年度はこれを更に深化させていくことが年度課題であると考える。また、韓国釜山女子大学の安春培氏、UCLAバークレー校のポズナンスキー氏の来訪や前ロンドン博物館のキャロライン・パシー・バーカ氏の調査参加もあった。国際化と言うわけではないが、諸外国の研究者との自由な交流が展開できるようにしていくことも課題として残ったといえよう。　　（加藤安信）